

ヘミングウェイとフロズンダイキリ

作家といえば、たいてい大の酒好きと相場が決まっているものだが、ヘミングウェイの場合は、その飲みっぷりの豪快さ、底なしぶりにおいてとにかく断然都を抜いていたと言っているだろう。

キューバ時代のヘミングウェイの暮らしぶりを描いた「ヘミングウェイ・キューバの日々」(ノルベルト・フエンテス著)によると、友人たちと1日にウイスキーを3-4本開けるのがまず平均的なエブリディ・ドリンキングの基本。昼食と夕食にはお気に入りのロゼワインをたっぷり飲むのが習わしだったそうだ。

1940年に買い取った、ハバナ郊外の農場「フィンガ・ビヒア」に作ったプールで泳いだあとその日の最初の飲み物は、ハイボールかトムコリンズ。原稿執筆中は素面を守りとうしたが(夜明けから午前中いっぱい、立ったままで!草稿を書きつづけた)グラスを手にする時間が来ると、気分のおもむくままにさまざまな酒を飲み干した。感傷を排し、冷徹なタッチで対象物を描くハードボイルド作家らしく?、生涯一瓶一酒などという枯れた飲み方とは対極のなんともパワフルで、自由闊達な飲みっぷりであった。

自宅フィンガ・ビヒアで飲まないときには、ハバナのオビスポ通りにあるバー・レストラン「フロリディータ」へと出かけていった。もちろん大好物のフロズンダイキリを飲むためである。オールドハバナの一角にあるこの古い酒場に、ある日ぶらりとやってきたヘミングウェイは、クラッシュアイスを入れたカクテルに出会う。それがフロリディータの主人コンスタンテの考案になるフロズンダイキリなのであった。

この涼気満点のカクテルをヘミングウェイが偏愛しはじめるのは、フィンガ・ビヒア購入前の1930年代だったという。ダイキリそのものは以前からキューバで飲まれていたそうだが、アイス・キューブの代わりに細かく砕いたクラッシュドアイスを入れたのは、コンスタンテのアイデアであった。このフロズンダイキリを砂糖抜きでダブルで注文するのがヘミングウェイの流儀だった。これをフロリディータでダース飲むのが定量だったそうだが、ラムのボトル一本をゆうに越える量だ。立ったままで何時間でも原稿を書き続けることのできるタフネスさを身につけている人らしい、じつにタフで見事なまでのダイキリ・ドリンカーとしてパパ・ヘミングウェイはカクテルの世界にその名をとどめている。

ハバナで飲むフロズンダイキリとフロリディータの素晴らしさを、機会あるごとにヘミングウェイは語りつづけてやむことがなかった。第2次世界大戦後のアメリカでダイキリがたちまちポピュラーになったのはヘミングウェイの(ハバナ通信)の波及効果に負うところが大きかったと「キューバの日々」の著者フエンテスも指摘している。

ヘミングウェイが同じように愛したもう一軒の酒場「ラ・ボデギータ・デル・メディオ」には、こんな記念プレートが飾られているそうだ。

“ わがダイキリはフロリディータ
わがモヒートはボデギータ “